

疑問 を“探究的な” 問い に仕上げよう！

今回の学力向上検討委員会の公開授業は、長谷中学校にお伺いしました。

学校全体の研究テーマである「問いの解決に向けて主体的に探究する生徒の姿を目指して」の達成を目指し、今回の授業では学習指導における生成AIの活用を大きな柱としています。

授業の主眼は「漢詩に対して抱いた『疑問』を、様々な視点から『問い』に変換する活動を通して、古典に表れるものの見方や考え方に對する考えを形成することができる。」特に、生徒が抱いた「疑問」を探究的な「問い」へと昇華させる活動に焦点を当て、生成AIを理解の補助や思考の拡張のためのツールとして利用しています。



うまく問いの形に変換できない生徒には生成 AI も使用してみるよう促します。
プロンプトは、学習の見通しを持つ段階で、生徒とともにサンプルを作成し、スクールタクトの資料として共有しています。



「生成 AI を使って問いの形にはなったけど、自分で説明し直せないかも？自分の言葉で説明できるようにしよう！」

問い

「最後の二行で別の表現技法を使っていたら、どんな詩になっていたのだろう？」

生徒は「疑問」を自分の選んだ「技法」という視点と組み合わせて探究的な「問い」を考えました。
この問いが「探究的か」「教科の資質・能力に即するか」をチェックしながら探究を進めていきます。

視点

作者
時代（背景・現代）
技法
言葉の選び方・順番
比較

技法

疑問に技法を組み合わせてみよう！

「最後の二行は本当にいるのか？」

疑問

授業の指導案はTeams「InaWaku2025授業づくり」参照

指導案では「初等中等教育段階における生成 AI の利活用に関するガイドライン Ver.2.0」の児童生徒が学習場面で利活用する際のチェック項目に対して次のようなことに配慮が行われています。（抜粋）

□教育活動の目的を達成する観点で効果的であることを確認しているか

「①視点の獲得 ②伴走者の動きを期待して生成 AI を活用することで、国語科として目指す資質能力の育成に加え、探究学習の成功体験を通して探究のサイクルが学習者の中に形成されることを目指す。」（P1）

「特に生成 AI 活用の狙いとしては ①理解の補助 … ②思考の拡張 … ③活用の距離感… の3点を想定している。」（P2）

□児童生徒の発達の段階や情報活用能力の育成状況に十分留意しているか

「本学級の生徒の実態として…長文や難解な語句…に対する苦手意識…粘り強く学習に取り組めるような支援が必要…そこで今回は、『粘り強さ』そして『自己調整力』向上のために2つの手立てとして 探究学習（スタイル）生成 AI 活用（ツール）を据えた。」（P2）

「うまく問いの形に変換できない生徒には生成 AI も使用してみるよう促す。」（P4）

□生成 AI の性質やメリット・デメリット、情報の真偽を確かめる、自己の判断や考えが重要であることを十分に認識できるような使い方等に関する学習を実施しているか

「※『問い』に対する回答を生成 AI に直接生成させたとしても、その内容への吟味に重点が置かれるよう支援する。」（P3）

「学習はあくまで『自分のため』であり、直接的な答えを出力させることは知識の定着や応用力につながらないことを体験的に味わうため。」（P2）

□生成 AI サービス提供者の最新の利用規約を確認・遵守しているか（年齢制限や保護者同意、生成物ライセンスなど）

「生成 AI の使用に当たっては、利用規約を踏まえて、年度初めに保護者の許諾をいただいている。」（P1）

□生成 AI の生成物をそのまま自己の成果物として使用することは自分のためにならないこと、使用方法によっては不適切または不正な行為になることを十分に指導しているか

「『問い』に対する回答を生成 AI に直接生成させることはしないようにする…」（P3）

「※『問い』に対する回答を生成 AI に直接生成させたとしても、その内容への吟味に重点が置かれるよう支援する。」（P3）

「学習はあくまで『自分のため』であり、直接的な答えを出力させることは知識の定着や応用力につながらないことを体験的に味わうため。」（P2）

青字…チェック項目、（P1）…項目が該当する指導案のページ

長谷中学校 幸村 怜 先生の授業と研究会の様子をもとに推進センターでまとめさせていただきました

伊那市学校教育情報化ビジョン2024

探究的な学び 先進的な学び 個別最適な学び 協働的な学び 自主的な学び 子どもと共に未来を創る教員